

1^ capitolo

第一章

夜明けが来るとともに夢が消えてなくなる・・・それは本当じゃない

みなさんは子供のころ引き出しに夢をしまっておいたでしょ？わたしの引き出しにあった夢は「いつの日か Alfa Romeo (アルファロメオ) で働くこと」でした。

わたしは言語学の卒業証書を手に最初の仕事を始めました。貿易会社に勤務し、Salerno (サレルノ) 県の皮むきトマトとパスタを工場に紹介する仕事でした。急な仕事が入って Napoli (ナポリ) 行きの最終バスの時間に間に合わないなんてこともよくありました。こんなときには、Ettore Di Nola (エットーレ・ディ・ノーラ) という名の C. E. O. (社長) が彼の緑色の Giulia 1600 Super (AR 716 - レザー内装) にわたしを乗せてくれました。・・・Nola という名は運命的な名で、1962 年から 1972 年ごろ Alfa にも Raffaello di Nola (ラッファエッロ・ディ・ノーラ) という名の C. E. O. (最高経営責任者) がありました。・・・社長の専属ドライバーは Salerno-Napoli (サレルノ～ナポリ) 間のアウトストラダをアクセルペダル全開で駆け抜けたのです。・・・なんという経験でしょう、こんなにエキサイティングになったことはありませんでした！・・・わたしは疑問に思いました。このような車 (スポーツカー) を所有している人がどうして自分で運転しないのか？どうしてドライブする楽しみを放棄しているのか？内気なわたしは直接聞くことが出来ませんでした。

Alfa Romeo へのリクルート活動ができなかった期間のプライベートな出来事についての話はここでは控えましょう。でも、もし強い要望があればお話しすることがあるかもしれません。

わたしは家族とともに Saronno (サロンノ) に引越して仕事を見つけましたが、いつも Alfa のことを思っていました。そのときわたしは夢のすぐ近くにいたのです。Saronno から 13 km はなれた Arese (アレーゼ) にその頃には既に Alfa Romeo があったからです。わたしは雇用申請の手紙を送り続けました。そしてとうとう Portello (ポルテッロ) にある人事部から面接の召集を受けたのです。Bullona (ブローナ) のバス停から Gattamelata (ガッタメラータ) 通りへ移動する道すがら、ただ、ひたすら雇用されることを祈っていたことを覚えています。面接を 3 回受け、速記タイプをテストされ、そして書簡翻訳 (英語とフランス語) をして・・・ついに、今でも大切に保管してあるあの電報を受け取りました。・・・「**選考試験結果良好のため、来る 1 月 3 日 Gattamelata 通りにお越し願う旨通知する**」・・・もうすこしで気絶するところでした・・・とうとう夢が実現したのです！

Portello で働いた数年間を思うと、大きな喜びとともに当時のことが思い出されます。50 年代の Portello 工場ではエンジニア、従業員、労働者、メカニックがレーシングドライバーの横で疲れることを知らず働いていました。また彼らは無敵の Alfetta (アルフェッタ) を積み込んでレースが行われるサーキットに向けて工場から出て行く巨大でアッシュグレーに塗られたトランスポーターを誇りを持って見送りました。そんな Portello 工場を離れて Arese に転勤になったときの苦悩は相当なものでした。Arese での最初の仕事は Direzione Relazioni Esterne e Stampa (渉外広報部門) での仕事でした。配属されたのは、社内で発生したニュースを常時受信するセクションで、頻繁にトップレ

1^ capitolo

ベルのエグゼクティブや有名人（レーシングドライバーもいました）と接触を持つセクションでもありました。

わたしのArchivio Storico（歴史アーカイブ）の仕事は1984年11月に始まりました。当時のアルファロメオ・プレス・オフィスの責任者からCentro Documentazione（情報資料センター）内のあちこちの部屋に積上げられて放置されている膨大な映像と文書を整理する仕事を委託されたのです。正直言って、すぐには熱心にその仕事にとりかかれませんでした。その仕事は、誰かが片付けなければならなかったにもかかわらず、何人かの男性社員によって「体裁良く断られた」ものだったということを知ってしまったのです。怒りを感じていました。退屈な仕事も引き受け、常に前向きに、熱心に取り組むという理由だけで、この人事はわたしのもとに転がり込んできたのです。

わたしはAlfa Romeoを愛してきました。それは、Alfaの車たちがずっと好きだったから。わたしの家族は2600 Berlinaから始まっていつもAlfaを所有してきました。Napoli（ナポリ）にドライブに行ったときなんかは、みんながAlfaに見とれていたけど、こんなことが誇り高く思い出されます。

パーキングの管理人でさえ宗教的ともいえるリスペクトを持っていて、わたしの父がAlfaをパーキングに入れなければならなかったとき、よく父に手招きして言っていました。「Dottò, mettitela cca... accusì nun na tocca nisciuno（ナポリ弁）」・・・翻訳しますね・・・「ご主人、ここにお停めください・・・誰も手を触れられませんから」

今日はこのあたりで終わりにしましょう。でも約束します、わたしのAlfa・・・おんなのAlfa第二章をすぐに発表します。また読んでくださいね。

[Elvira Ruocco \(elvira.ruocco@alfasport.net\)](mailto:elvira.ruocco@alfasport.net)